

# 日本語を楽しく

## 【第22回】たまには百人一首を

作家 阿刀田 高



小倉百人一首への興味は……初めは落語だった。

横町の熊さんがご隠居さんに、

「これって、どういふことなんですか？」

と在原業平の歌の意味を尋ねる。すなわち、

ちはやぶる神代もきかず龍田川

からくれなゐに水くくるとは

である。



ご隠居さんが答えて、

「これはだな、龍田川という相撲取りがいたんだ。それが吉原へ遊びに行つて、ちはや花魁にふられ、次に妹分の神代に声をかけたが聞いてもらえず……」

龍田川は廃業して故郷で豆腐屋に精を出し、そこへ落ちぶれた花魁が訪ねて来て……「おからをくださいな」。だが、おからももらえず川へドブーンと水をくぐり……。よく知られた古典落語である。

同じころ、私は小学六年生だったと思うのだが、

もう一つ、

筑波嶺の峯よりおつるみなつくばねのみなの川

恋ぞつもりて淵ふちとなりぬる

陽成院ようせいゐんの歌にも珍妙ちんみょうな解釈(?)があつて、これも相撲取り、筑波嶺つくばねと男女川みなのがわ、人気の取組みがあつて、筑波嶺の巨大な峯のような体から男女川が投げ落とされ、見物人が「わあーッ」と歓声をあげたところ、その声が殿様の耳に入り、「そうか。天晴あっぱれ扶持ふちを取らせよう」となる。扶持という言葉を、主君たまわから賜るお

金のことと知ったのも、このときだったろう。子どもながら嘘うその解釈とは知っていたが、このせいで百人一首に関心を抱き、百首全部を覚え、一通り、この遊びに精通することができた。古典文学への興味も湧わき、それが一生涯、今日にまで

続いている。百人一首さまさまである。

正月、久しぶりに小倉百人一首を取り出し、ながめてみると、昔とはちがった発見がある。

住すみの江えの岸きによる波なみよるさへや

夢ゆめの通とほひ路ぢ人ぢめよくらむ

藤原敏行ふじわらのとしゆきの歌は、波が「寄る」のと夜とをか

中でさえ人目を避け、結局「あなたに逢うことができなかつた」と嘆なげいているわけで、どことなく、

——フロイト的世界せかいだなあ——

夢の不思議さを考えてしまった。

かけ言葉はこの時代の歌の特徴で、「つまらない」と思おもえばまことにつまらないけれど、

たち別わかれいなばの山の峯ねにおふる

まつとしきかばいま帰り来こむ

在原行平ありわらのゆきひらの歌は因幡いなばの山の松と「待つ」とを

かけているのだが、「待つ」というあなたの声を聞いたなら「すぐ帰かえつて来こますよ」は情感がこもつていて、

——わかるよな、この心境——

来こし方の長い年月に思おもいを馳はせてしまふ。

私の育そだつた家では……正確せうさくに言えば近所きんじよに住すむ

お婆おばあさんが呟つぶやいていた言葉ことばなのだが、

「ほら、今いま、コンと狐きつねが鳴ないた待ちぼうけ」

待ち人が現あらわれないと、こう言いつてからかうのである。やぶの中の狐きつねまでがばかにしているよう

いま来こむといひしばかりに長月ながつきの

有明ありあけの月つきを待まちち出いでつるかな

素性そせい法師ほうしの歌からだろうが、待ち人まちびとというのは古来こらいなかなか現あらわれぬものらしい。

百人一首を思おもい起おこして待ち続まちつづけるとしよう。

